

〈特立〉を行う「こそ」の変容をめぐって

森 野 崇

【キーワード】「こそ」 とりたて 特立 係助詞 係り結び

1 はじめに

本稿では、係助詞「こそ」の諸用法のうち、〈特立〉に焦点をあて、その変遷をたどる。まず次節で、「こそ」の主な用法を概観したうえで平安時代の〈特立〉に関して解説し、現代語には見出しがたいタイプを指摘する。その後、中世から近世にかけての〈特立〉用法の変容を見ていく。

なお、もっぱら韻文の『万葉集』を資料としての考察になることなどもあって、今回は特に論じないが、奈良時代の「こそ」にも、本稿で扱う〈特立〉の「こそ」は認められることを付け加えておく。

2 古代語の「こそ」の〈特立〉

現代語の「こそ」については既に多くの研究があるが、野田尚史(2002 予定)によれば、その用法は、排他的なとりたてを行う〈特立〉、逆接の条件節中にのみ見られる〈譲歩〉、対話にのみ見られる〈反論〉の3種にまとめられる。(1)が〈特立〉、(2)が〈譲歩〉、(3)が〈反論〉の用法である。

- (1) 林さんこそ会長にふさわしい。
- (2) メダルこそ取れなかったが、入賞はした。
- (3) おまえこそ何やってんだ。

古代語の場合も、〈反論〉と解せる例が少ないものの、これらの用法はいずれも認められる。〈特立〉〈譲歩〉〈反論〉の順に、(4)～(6)に示す。

- (4) 大納言はものものしう清げに、中將殿はいとらうらうじう、いづれもめでたきを見たてまつるに、殿をばさるものにて、上の御宿世こそ、いとめでたけれ。(『枕草子』淑景舎、東宮に参りたまふほどのことなど)
- (5) 昔こそ難波ゐなかと言はれけめ今都引き都びにけり(『万葉集』巻3 312)
- (6) (源氏へノ恋文ヲ)片端づつ見るに、(頭中將)「よく、さまざまなるものどもこそはべりけれ」とて、心当てに、「それか、かれか」など問ふ中に、言ひあつるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふも、をかしとおぼせど、言少なにて、とかくまぎらはしつつ、とり隠したまひ

つ。(源氏)「そこにこそ、多く集へたまふらめ。少し見ばや。……」とのたまふに……(『源氏物語』帚木)

このうち、本稿で特に問題にするのは〈特立〉の「こそ」である。現代語の〈特立〉の「こそ」について、(1)を用いても少々詳しく述べると、この「こそ」は、「誰が会長にふさわしいか」が問題になっている状況で、表現主体が、最もふさわしいと判断した人物である「林さん」を、他の候補者を排して選択したことを示している。これが、林さんが「森さんが会長にふさわしい」と言ったのをうけた森さんの発話ならば、〈反論〉とみることも可能だろうが、いずれにせよ、この種の「こそ」は、最上位のモノ・コト、最もふさわしいモノ・コトとして、他の対象を排してそれがとりたてられたことを明示する助詞だと分析できる。

上の(4)のように、古代語の「こそ」の〈特立〉も基本的には同様に考えられる。しかしながら、次の(7)～(9)の類はいかがであろうか。

- (7) 右近の君こそ、まづもの見たまへ。中将殿こそ、これより渡りたまひぬれ。(『源氏物語』夕顔)
- (8) 上こそ。この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ。(『源氏物語』若紫)
- (9) 宰相中将こそ参りたまふなれ。例の御匂ひ、いとしるく。(『堤中納言物語』このついで)

(7)は、先払いをしながら大路を通過していく車を屋敷の内から観察しての、童女の発話で、事前に大路を渡る人物のことが話題になっていたわけではない。そもそも、既に眼前に展開している一回的・個別的事象を述べた文であるから、最もふさわしい人物として他の対象を排して選択されたことを明示する「こそ」が使用される状況とは考えにくい。(8)も、源氏の来訪という一つのできごとの報告であり、来訪者の候補が複数想定される中で、最もふさわしい人物として源氏が選択されたことを述べるなどという発話ではない。(9)も同様である。丹羽哲也(1997)は、現代語で「こそ」が用いられにくい例として「花子こそ結婚した」「当事者の山田さんにこそ聞いてみた」等をあげ、それらの不自然さについて、『結婚した』のは誰か事実として既に一つに決まっていることであり、それを選ぶだけであるから、候補の中で誰がふさわしいかということは関与しないのである(127ページ)と、その理由を述べているが、(7)～(9)は、既成立の事態として捉えられた事柄に「こそ」が用いられた例なのである。

このような一回的・個別的事象の報告であれば、確かに現代語では「こそ」は使用されず、むしろ主格表示の「が」が用いられることになる。事実、(7)ならば「中将様がここをお通りあそばします」(角川文庫[角川書店])や「中将様がここをお通りになりました」(新編日本古典文学全集[小学館])、(8)ならば「あのお寺にいらした源氏の君がおいでになったのですって」(角川文庫)や「あのお寺にいらした源氏の君がおいでになったのですって」(新編日本古典文学全

集)などというように、諸注釈書はこれらの「こそ」を「が」に直して訳出している。

現代語に認めにくい〈特立〉の「こそ」には、別のタイプも存する。次に示すのは、一回的・個別的事象を述べた文ではなく、野田尚史(2002 予定)が〈特立〉の「こそ」にめだつ偏りの一つとして指摘する、話し手の評価や感情、あるいは主張が述語に入った文に用いられた「こそ」である。

(10) 思はむ子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。(『枕草子』思はむ子を)

(11) 野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。(『枕草子』野分のまたの日こそ)

(12) かく、この御心とりたまふほどに、花散里を離れはてたまひぬるこそ、いとほしけれ。(『源氏物語』澤標)

これらは、「こそ」による〈特立〉が行われるのに問題のない文のはずであるが、例えば日本古典文学大系(岩波書店)の『枕草子』の現代語訳は、(10)が「愛児を法師にしている人は、まことにいたいたいものだ」、(11)が「野分の吹いた翌朝は実にしみじみとして、しかも興味深いものだ」と、いずれも原文の「こそ」が「は」に置きかえられている。

(10)(11)は、『枕草子』の章段冒頭の一文である。したがって、これらが「どのような人が痛々しいと感じられるか」とか「いったいつがしみじみとして興味深いか」などといったことが問題になっている状況で叙述されているとは見なしがたく、当然、そこにあてはまる候補として比較される他の対象も想定できない。(12)も、話題が転換した、その最初の一文である。現代語ならば、このように文章や発話の冒頭で、「愛しい子どもを法師にしているような人こそ痛々しい」などといきなり〈特立〉の「こそ」を用いることはほとんどないだろうが、古代語ではこのような「こそ」の例が珍しくないのである。上に紹介したものをはじめ、諸注釈書の現代語訳でこのタイプの「こそ」が多く「は」になるのは、前述のとおり、これらがあるモノ・コトについて話し手の評価や感情を述べる文で、かつ「何が〜か」といったことが話題になっているとも思えないため、主題とそれに関する記述として処理されやすいからであろう。

ところで、ここで解説してきた、現代語に認めがたい「こそ」は、体言あるいは準体言に後接したものに限られるわけではない。「体言+格助詞」や活用語連用形、副詞等に「こそ」が後接した例の中にも見出すことができる。

(13) いとあやしきことをこそ聞きはべりしか。(『源氏物語』蜻蛉)

(14) 身もいと恥づかしくこそなりぬれ。(『源氏物語』帚木)

(15) げにこそ、いとかしけれ。(『源氏物語』若紫)

いずれの「こそ」も〈特立〉用法と解されるが、他の対象を排してのとりたてとは考えがたい。(13)のような「体言+格助詞+こそ」であれば、

(16) まろは、内裏の上よりも宮よりも、ははをこそまさりて思ひきこゆれ

ば、おはせずは心地むつかしかりなむ。(『源氏物語』御法)

のように、具体的に想定される他の対象を排してのとりたてであることが明らかな例もあるが、(14)(15)のような「連用修飾成分+こそ」については、他の連用修飾成分によって修飾した場合と比較したうえで、それらを排して「恥づかし」や「げに」を選択したなどとはまず解せまい。野田尚史(2002 予定)は、現代語の〈特立〉の「こそ」の前接成分が、主格か理由を表す「～から」に偏向することを指摘している。つまり、(13)～(15)のような承接自体が見られなくなってきているわけで、これらの例は、古代語の「こそ」の〈特立〉用法が、現代語よりも広く種々の成分に後接する形で行われていた事実を示している。承接の点でも、また他の候補を排しての選択とは解せない点でも、現代語には見出しがたいものとして注意を払う必要がある。

このように、古代語の〈特立〉の「こそ」には、現代語にはないタイプの例が少なからず存在する。では、これらの「こそ」のはたらきは、どのように分析すべきだろうか。先行研究にも、この「こそ」に言及した論はある。例えば、佐伯哲夫(1971)はこれらの「こそ」を「特示強調」と名づけ、「これは対比の意識を伴わないのが普通で、したがって対象を狭く限定する意識はないか、あってもきわめて希薄である」(45 ページ)としているし、この考察をうけた半藤英明(1993)も、「他の結合を意識に入れられないか、或いは殆ど意識することがない『絶対的取り立て』」(34 ページ)を行うものとみて、「結合強調」の用法とまとめている。

だが、これらの解析にしたがった場合、「こそ」といわれる〈強調〉の係助詞である「ぞ」「なむ」との相違が、見えなくなるのではあるまいか。佐伯哲夫(1971)は、富士谷成章が『あゆみ抄』で行った考察を参照し、これらの「こそ」を「ぞ」の性格をもつものと認めた論であるが、「ぞ」ではなく「こそ」を用いる以上、通じる部分はあるにしても、やはりそこには「ぞ」と「こそ」の機能の違いに基づく選択がはたらいっていると考えるべきであろう。そして、その「こそ」の機能は、具体的な比較の対象が存する状況でそのモノ・コトを最上位としてとりたてる用法と、当然連続するはずである。

このタイプの〈特立〉の「こそ」については、森野崇(1988)で検討したことがあり、また別稿で再論する予定であるが、簡単に述べれば、これらの〈特立〉では具体的に比較される対象は想定されないものの、「こそ」のとりたてによって、既成立の事態を述べる文の場合は「他の何でもなし」「他の誰でもなし」、評価や感想等を述べる文の場合は「他の何よりも」「他の何にも増して」といった表現主体の把握が、明示されることになるのだと解される。具体的なモノ・コトを退けているわけではないが、他の対象を排してとりたてる「こそ」の機能が、そこには確実にはたらいっている。現代語では、このような表現主体の把握を明示する目的で「こそ」を使用することはないと思われる。そのため、先に引いたよう

に、古典文学作品に見られる「こそ」が、「が」「は」に現代語訳される結果となるのであろう。

3 中世の状況

3-1 中世における現代語には認めがたい「こそ」

前節でとりあげたタイプの「こそ」は、中世に入っても引き続き用いられているのだろうか。佐伯哲夫(1971)は、『古今和歌集』と『新古今和歌集』の比較を行い、この種の「こそ」が『新古今和歌集』においてはわずかに増加していることを指摘しているし、中古・中世の文献を幅広く調査した半藤英明(1993)の報告からも、この種の「こそ」が依然として盛んであることがうかがえる。具体例を眺めながら、そのあたりを確かめておこう。

まず、院政時代の資料となる『今昔物語集』、同じく説話集で中世に入って成立した『宇治拾遺物語』から、このタイプの「こそ」を数例示す。

- (17) 此カル事こそ候ヒツレ。(『今昔物語集』巻27-28)
- (18) 新源少将ノ君こそ御シテ、此カル事ヲナム告ゲ給ヒツレ。(『今昔物語集』巻28-4)
- (19) 兼久こそかうかう申して出でぬれ。(『宇治拾遺物語』10)
- (20) ……雀のいたく鳴く声しければ、雀こそいたく鳴くなれ、ありし雀の来るにやあらんと思ひて……(『宇治拾遺物語』48)
- (21) ……基増が、案ニ落チテ此ク云ハレタルこそ弊ケレ。(『今昔物語集』巻28-8)
- (22) あはれに、忘れず来たるこそあはれなれ。(『宇治拾遺物語』48)

(17)～(20)は、既に成立している一回的・個別的事象を叙述した文であり、現代語ならば「が」が使用される場所かと思われる。例えば(19)は、自分の歌が勅撰集に入ることを期待して、撰者である藤原通俊の許を訪ねた秦兼久が、さして評価されなかったことに立腹し、通俊に仕える侍たちに向かって、自分の歌に対する批判が的外れであることをまくしたてて出ていってしまうという話からの引用で、兼久の捨てぜりふを残しての退出を、侍たちが通俊に報告する発話である。この展開から判断して、他の人物と比べたうえでの「兼久こそ」とは見なせない。

(21)(22)は、当該の事態について、表現主体が評価や感想を表出した例である。(21)を例にとれば、これは「つたなし」という評価が最もふさわしいと考えられる事態を、複数の候補から選択したなどという発言ではない。あるコトとそれに関しての評価という構成の文であるから、現代語では「こそ」よりも「は」の方が用いられやすいであろう。

(21)(22)のように、あるモノ・コトに関して表現主体の評価・感想を述べた形容詞文タイプの文にこの種の「こそ」が用いられた例は、平安時代では『枕草

子』にめだったが、中世でも随筆文学である『徒然草』に多い。

(23) 神楽こそ、なまめかしくおもしろけれ。(『徒然草』16段)

(24) 七夕祭りこそなまめかしけれ。(『徒然草』19段)

(23)は章段の冒頭に位置する文であり、(24)も夏の話から秋の話へと話題が転換された、その最初の一文である。文脈のうでで「なまめかしくおもしろきもの」や「なまめかしきもの」の論が展開されていて、他の対象と比べた末に「神楽」や「七夕祭り」が選択されたのでないことは、明らかであろう。

なお、承接面に目を向けると、これまで例に引いてきた「体言+こそ」「準体言+こそ」のほか、現代語ではわずかになりつつある、形容詞連用形や副詞といった連用修飾成分に後接した例、また「体言+格助詞」に後接した例等が、この期の「こそ」にも引き続き少なからず認められる。その中には、他との比較のうでで選択したことを示す、現代語の「こそ」の〈特立〉と同様の例もあるが、

(25) 晴明見レバ、^{シカ}可然^{アル}ベキ所ニ車宿リナドヲ^{コソ}臨キ行クメレ。(『今昔物語集』巻24-16)

(26) いとこそあいなからめ。(『徒然草』240段)

など、具体的な比較の対象が想定しえない、本稿で扱っているタイプの例も見出される。この点も、平安時代の〈特立〉の「こそ」と変わってはいない。

3-2 『平家物語』および『天草版平家物語』の「こそ」

前項で見たように、中世に入っても、他のモノ・コトと比べた結果の排他・特立とは認めがたい「こそ」は使用されているが、次に『平家物語』中の「こそ」をとりあげたい。『平家物語』の係助詞については、『天草版平家物語』との比較による考察がしばしば行われており、係り結びによる強調表現から他の方法による強調表現へとシフトしていくさまが捉えられもしている。安田章(1980)が注意しているとおり、『天草版平家物語』を扱う際には、その訳者の意図等も配慮しなければならないが、二つの文献の間で「こそ」の特殊な〈特立〉用法に差異が生じているかどうかを確かめる作業は、やはり必要であろう。この項では、『天草版平家物語』の例もあわせて見ておくこととする*1。

『平家物語』の場合も、ここで問題にしている〈特立〉用法の「こそ」を採取することはむずかしくない。

(27) 当時都に聞こえ候ふ仏御前こそ参つて候へ。(『平家物語』巻1・祇王)

(28) 祇王こそ入道殿より暇給はつて出でたんなれ。いざ見参して遊ぶむ。
(『平家物語』巻1・祇王)

(29) そのうへ年もいまだ幼うさぶらふなるが、たまたま思ひ立つて参りてさぶらふを、すげなう仰せられてかへさせ給はむことこそ^{ふひん}不便なれ。
(『平家物語』巻1・祇王)

(30) 日ごろの契約をたがへず、参りたるこそ神妙なれ。(『平家物語』巻2・烽火之沙汰)

(27) は、評判の白拍子である仏御前の来訪を、家の者が主人の平清盛に伝える発話で、来訪者をめぐる会話がこの前に交わされていたわけではない。(28) も、祇王の清盛邸からの退去といった既成立の事態を述べた発話で、事前に退去した人物が問題になってはいない。

(29) (30) は、どちらも相手の行為に関する感想を述べた発話である。(29) は祇王から平清盛への発話で、門前払いという仕打ちのひどさを納得させようと、「何にも増してかわいそうだ」という意の発言を、「こそ」を用いて行っているものである。(30) は参集した武士たちに向けられた平重盛のことばであるが、「こそ」を使ったことで、「他の何にも増して殊勝だ」といった、より武士たちを讃える発話になっている。

『天草版平家物語』にも、この種の「こそ」は認められる。

(31) 行綱こそ申さうずる子細あって、これまで参った。(『天草版平家物語』巻1-3)

(32) これ見よ。この子が文の書きやうのはかないことよ。おのを供にして急いで上れと書いたことこそうめしい。(『天草版平家物語』巻1-12)

これらはいずれも、『平家物語』でも「こそ」が使用されている箇所であり、「こそ」の使用に関する違いは見られない。上に引いた(27)(28)も、

(33) 当時都に聞こえまらした仏御前こそ参ってござれ。(『天草版平家物語』巻2-1)

(34) 祇王こそ清盛の暇を下されて出たといふに、いざ見参して遊ばう。(『天草版平家物語』巻2-1)

と、『天草版平家物語』においても、当該の「こそ」はそのまま見られる。

しかしながら、『平家物語』の「こそ」が、『天草版平家物語』では消えている場合も存する。例えば先の(29)(30)は、『天草版平家物語』ではそれぞれ、

(35) そのうえ年もまだ若うござるが、たまたま思いたって参ったを、すげなう仰せられて帰させられうことは、不便な儀ぢゃ。(『天草版平家物語』巻2-1)

(36) 日頃の契約をたがえず、参ったることは、まことに神妙な儀ぢゃ。(『天草版平家物語』巻1-6)

と、「こそ」の代りに「は」が用いられた形になっている。このように、『平家物語』で使用されていた「こそ」が、『天草版平家物語』では他の助詞に置きかえられるなどして消失している例は、決して珍しくない。

(37) ……とうれしく思ひて静かに歩ませゆくところに、いけずきとおぼしき馬こそ出で来たり。(『平家物語』巻9・宇治川)

(38) ……とうれしう思うて静かに歩ませゆくところに、いけずきとおぼしい馬が来た。(『天草版平家物語』巻4-2)

(39) 向かひの岸に渡りついて、上がらんとするところに、後ろよりものこそひかへたれ。(『平家物語』巻9・宇治川)

(40) 向かいの岸に渡りついて、のぼらうとするところに、後ろにものがひかえた。(『天草版平家物語』巻4-2)

(37) (39) は既成立の一回的・個別的事象を描写した文に用いられた「こそ」の例だが、対応する(38) (40) では、「こそ」の位置に「が」が置かれている。

前述のとおり、訳者の意図の問題は残るにしても、この交替現象の背景に、これまで見てきた「こそ」の〈特立〉用法の狭まりを想定するのは、無理な分析ではあるまい。具体的な比較対象のない状況における「こそ」の使用が、当時なお盛んであれば、『天草版平家物語』の「こそ」の分布も、もう少し異なっていたのではないだろうか。なお、先の(36)では、『平家物語』の方にはない「まことに」が「は」の後に用いられているが、これは「こそ」を「は」に変更した結果失われてしまうニュアンスを、少しでも残すための工夫と解されよう。

3-3 狂言の「こそ」

『天草版平家物語』に見出された「こそ」の変質の徴候は、ほぼ同時期の口語資料と考えられる狂言にも認められる。すなわち、

(41) かなわかこそ狂乱して都辺土をかひ廻る。(『大蔵虎明本狂言集』かなわか)

といった、既成立の一回的・個別的事象を述べる文に用いられた「こそ」の例はわずかであり、

(42) お神楽こそめでたうおりやらしませ。(『大蔵虎明本狂言集』いしがみ)などの、比較されるモノ・コトのない状況で、「こそ」によって対象をとりたて、その評価や感想を述べるタイプの例も、さほど見られないのである。

承接面に関しても、「体言+格助詞」、副詞、あるいは助動詞連用形に後接する場合などは、『平家物語』等に比べてその数を減らしており、種々の成分に付くという特徴が後退しつつあるようだし、特定の語への後接に傾斜する、表現の定型化・固定化というべき現象も確認される。例えば、形容詞連用形に付いた「こそ」は全体の10%以上あり、増加しているかのように思われるが、その大部分が「ようこそ」という形である。

(43) ようこそ思い切つたれ。(『大蔵虎明本狂言集』こひ賀)

といった例もあり、もっぱら相手の訪問を歓迎する際に用いる挨拶表現として一語化したものとまではいえないが、現代語の「ようこそ」に至る中途の段階と見なせよう。このように、前接する形容詞が特定のものに偏ってきたことも、「こそ」の〈特立〉の狭まりと結びつけて解すべき現象かと思われる。

このほか、やはり現代語の用法と同一ではないものの、「それこそ」という形も10例以上存するし、固定化という点では、「さればこそ」の大幅な増加も見のがせない。狂言という資料の性格も考慮すべきだろうが、他の候補との比較を行った

うえでの〈特立〉でない「こそ」が見出しにくくなってきた時期に、固定的表現がめだちはじめたことは、連用修飾成分への後接等が減少してきた点とあわせて、注目しておきたい。

なお、古代語ではあまり採取できなかった、野田尚史（2002 予定）が〈反論〉とする例も、『大蔵虎明本狂言集』ではさほど珍しくなくなっている。これにも、やはり資料の問題が関与している可能性は否定できないが、現代語の「こそ」に近づきつつあることを示す現象の一つとも考えられよう。

4 近世の状況

、近世の資料からも、「こそ」の〈特立〉用法の変質は見てとれる。

まず、近松門左衛門の世話浄瑠璃を用いて、近世前期の「こそ」を観察するが、第一に注意したいのは、一回的・個別的事象を描写する文の主格に立つ語に〈特立〉の「こそ」が付加した例が、狂言同様、きわめて少なくなっている点である。近松門左衛門の世話浄瑠璃 24 作品には、固定化した「ようこそ」等も含めて 300 を超える「こそ」が用いられているが、会話文中のこのタイプの例となると、

(44) ヤレ与兵衛めこそ蔵の家尻を切つたれ。(『卯月紅葉』)

程度しか見あたらない。

一方、あるモノ・コトについての属性や評価・感想等を述べた文で、事前にそのことが話題になっているわけでもなく、比較の対象が想定されないにもかかわらず「こそ」が使用されている例は、珍しくない。

(45) ……若い同士は気をたしなみ、死を先立てて涙を隠す、嘆きの色こそあはれなれ。(『淀鯉出世滝徳』)

(46) 夫婦はわつと伏しまろび、人目も忘れ泣きゐたる、親子の仲こそはかなけれ。(『冥途の飛脚』)

新編日本古典文学全集が「若い者同士は気を引きしめ、死ぬのを予定して涙を隠して泣く様子は哀れであった」、「夫婦はわつと泣き伏して、人目のあるのも忘れて泣いていたが、そんな親子の仲はまことにはかないものであった」と、それぞれ訳しているとおり、現代語ならばやはり「は」が用いられるところであろう。

ただ、このタイプの例のほとんどは、実は地の文に使用されている。周知のごとく、近松の世話浄瑠璃の地の文は基本的に文語で書かれており、したがって、当時この種の「こそ」が一般に用いられていた証左にはなりえない。そこで会話文の例を探してみると、新編日本古典文学全集で「よくもよくも罪業を重ねたは二人、死のうと気がついたのは、まだしも神仏の加護に叶うたというもの」と訳出されている、

(47) ……ようもようも罪業を重ねたは二人が身、死なうといふ気のついたこそ、まだも冥加に叶うたれ。(『丹波与作待夜のこむろぶし』)

が見られる程度である。そのほかは、相手の「煙管のらうは細くとも、御心を太

うして、心中など遊ばすな」という発言に対して言い返したもので、現代語でも「こそ」の使用に違和感が生じない、

(48) 言やるがくだい、不足なうて死ぬるこそ、ほんにまことの心中なれ。

(『淀鯉出世滝徳』)

といった、この〈特立〉用法に該当しない例ばかりが目につく。

以上の状況から判断して、本稿で問題にしてきたタイプの「こそ」は、近世前期におおよそ姿を消したと言えそうであるが、近世後期には、「こそ」の使用は現代語の場合とほぼ同じになる。今回は新編日本古典文学全集『洒落本 滑稽本人情本』所収の10作品^{*2}および『浮世風呂』『東海道中膝栗毛』について調査を行ったが、それらの作品でも、比較される対象が想定できないタイプの〈特立〉の例は、やはり会話文にはほとんど見出せない状況であるのに対し、

(49) 「おいらん、さあさあ待ちかねていた。きつい忙しいことだの」「……おめえさんこそ忙しいこつたね」(『傾城買二筋道』)

(50) 「オヤ、ぬしは寝なますのかえ。くすぐりイすヨ」「ナニ寝るものか。おめえこそ色男のことを考へてふさぐちやアねえか」(『春告鳥』初編)といった、野田尚史(2002 予定)が〈反論〉とするタイプの例は、現代語同様ごく普通に見られ、

(51) これはようこそ、まづこちらへ。(『東海道中膝栗毛』発端)

(52) 「背中を流してやらうか」「それこそばちがあたりますヨ。……」(『春告鳥』初編)

などの、現代語に連なる定型化した表現もかなり目につくようになる。このうち、「ようこそ」は狂言にも多かったが、そこではまだ、相手の来訪を歓迎するときに限って用いられるわけではなかった。この期の『東海道中膝栗毛』『浮世床』等では、もっぱら歓迎する際の挨拶表現として使用されている。

「こそ」の変容は、承接面からもうかがえる。前述のとおり、古代語の「こそ」は、「体言＋格助詞」による格成分、形容詞連用形とか副詞とかによる連用修飾成分等にも、自由に後接できた。中世以降、前接語ごとの違いはあるが、徐々に体言に直接する例以外は減少していく。近世前期の近松の世話浄瑠璃においても、

(53) ……文六に御ねんごろ、嬉しうこそおはしませ。(『堀川波鼓』)

(54) あはれ悲しや、またこそ魂の世を去りしは。(『曾根崎心中』)

といった例はあるものの、その数はやはり少なく、(53) (54) のように、特に会話文において連用修飾成分に〈特立〉の「こそ」が後接したものは、わずかである。金沢裕之(2002 予定)は、『大蔵虎明本狂言集』と近松の世話浄瑠璃、さらに式亭三馬の滑稽本と為永春水の人情本を資料に近世語の「こそ」を精査しているが、それによると、近世前期から近世後期にかけて、「体言＋こそ」と「活用語連体形＋こそ」を合わせた数値が43.8%から55.2%に増加しているのに対し、例えば「格助詞＋こそ」が18.0%→12.5%、「形容詞連用形＋こそ」が1.8%→1.0%、「形

容動詞連用形+こそ」が2.0%→0%、「副詞+こそ」が6.1%→1.0%と、それぞれ数値を減らしている※3。前接成分の偏向がより進んでいることが、うかがえよう。平安時代の『源氏物語』と中世の『平家物語』とを比較した場合、「体言+こそ」は35.4%→33.1%、「格助詞+こそ」が16.8%→33.4%、「形容詞連用形+こそ」が7.7%→2.5%、「形容動詞連用形+こそ」が2.0%→0.8%、「副詞+こそ」が6.1%→8.7%などとなっており、格助詞に後接した例の大幅な増加など、個別に検討すべき問題はある※4けれども、上述の流れは大筋で認められる。この承接面の変化が加速した時代が、近世なのであろう。

承接面では、やはり中古から中世にかけて減少しつつあった、「のみ」「ばかり」などといった副助詞に付いた例が、近世になって見られなくなる点にも注意しなくてはならない。近藤泰弘(2002 予定)が言及するとおり、この現象は「こそ」の係助詞性が失われ、とりたて詞化(副助詞化)が進んだことを示していよう。中世の間に進行した「こそ〜已然形」の係り結び構文の衰退も、思いあわせたい。

以上のように、近世の「こそ」には、承接面においても大きな変化が認められる。「こそ」の〈特立〉用法から具体的な比較の対象が想定されないタイプが消えるのは、その機能の狭まりを意味するが、それがほぼ完了したことは、体言への集中という、承接に関して認められる狭まりとともに、古代語に比べて「こそ」による強調表現が衰えつつあることを、示唆していよう。そして、ここにはおそらく、上でふれた係助詞性の後退も、密接に関与しているものと思われる。

5 おわりに

〈特立〉を行う「こそ」について、その変遷をたどってきた。係助詞グループ全体の衰微と「こそ」の変容との関連など、論じられなかった問題も少なくないが、すべて今後の課題としたい。

-
- ※1 『平家物語』は覚一本(日本古典文学大系〔岩波書店〕)を用いたが、百二十句本によったとされる『天草版平家物語』巻2-2以降については、新潮日本古典集成(新潮社)の本文も調査した。(37)(39)は新潮日本古典集成の本文を引いている。
- ※2 洒落本『妬婦人伝』『遊子方言』『甲斐新話』『古契三娼』『傾城買四十八手』『繁千話』『傾城買二筋道』、滑稽本『酩酊氣質』『浮世床』、人情本『春告鳥』の10作品である。
- ※3 これらは〈譲歩〉の例なども含んだ、各資料の「こそ」全体の数値である。〈譲歩〉の例を除くと、連用修飾成分に後接した例などはより減少する可能性がある。また、会話文に限定すれば、さらに「体言+こそ」の比率が増すことも予想される。なお、『源氏物語』『平家物語』の場合も、「こそ」の全用例から算出した数値である。
- ※4 「格助詞+こそ」が増えたのは、「とこそ」の大幅な増加によるところが大きい。平安時代の場合は、「と」には同じ係助詞の「ぞ」「なむ」の方が後接する傾向が強い

から、ここにはこの期の「ぞ」「なむ」の衰亡が絡んでいる可能性があろう。

【参考文献】(本文でふれたものに限る)

- 佐伯哲夫 (1971)「こそ」(『文法』3 巻 4 号,『語順と文法』関西大学出版部 (1976) 所収)
安田章 (1980)「コソの拘束力」(『国語国文』49 巻 1 号,『外国資料と中世国語』三省堂
〈1990〉所収)
森野崇 (1988)「係助詞『こそ』の機能－『源氏物語』を資料として－」(『学研究－国
語・国文学編－』37 号)
半藤英明 (1993)「古典語『こそ』の働き－取り立ての観点から－」(『国学院雑誌』94 巻
6 号)
丹羽哲也 (1997)「現代語『こそ』と『が』『は』」(『日本語文法 体系と方法』ひつじ書
房)
金沢裕之 (2002 予定)「特立のとりたての歴史的变化－近世以降－」(『日本語のとりたて
－現代語と歴史的变化・地理的変異－』くろしお出版)
野田尚史 (2002 予定)「現代語の特立のとりたて」(『日本語のとりたて－現代語と歴史
的变化・地理的変異－』くろしお出版)
近藤泰弘 (2002 予定)「とりたての体系の歴史的变化」(『日本語のとりたて－現代語と歴
史的变化・地理的変異－』くろしお出版)

【用例出典】

『万葉集』＝『萬葉集 本文篇』(塙書房),『枕草子』『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『平
家物語 (覚一本)』『徒然草』『東海道中膝栗毛』＝日本古典文学大系 (岩波書店),『堤中
納言物語』『平家物語 (百二十句本)』＝新潮日本古典集成 (新潮社),『源氏物語』＝『源
氏物語大成』(中央公論社),『天草版平家物語』＝『天草版平家物語対照本文及び総索引
本文篇』(明治書院),『大蔵虎明本狂言集』＝『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上～下』
(表現社),『曾根崎心中』『卯月紅葉』『堀川波鼓』『丹波与作待夜のこむろぶし』『淀鯉出
世滝徳』『冥途の飛脚』＝新編日本古典文学全集『近松門左衛門集 1・2』(小学館),『傾
城買二筋道』『春告鳥』＝新編日本古典文学全集『洒落本 滑稽本 人情本』(小学館)。
引用に際しては、宛て漢字、仮名遣い、句読点等、私意によったところがある。